

Sendai University Public Relations

Monthly Report

Vol.70 / 2012 Feb.

日本学生支援機構に採択されて実現した韓国体育大学校との国際交流協定校訪問プログラム



日本学生支援機構の平成23年度留学生交流支援制度プログラムで採択された「韓国体育大学校 国際交流協定校訪問プログラム」により両大学間での学生交流が図されました。

先に韓国体育大学校の教職員3名と学生5名を2月14~19日に受け入れ、本学でのキャンパス見学や学生交流、宮城県の観光や文化交流などを行いました。2月19~26日には本学から国際交流センター長である鎌田教授と斎藤現代武道学科長、中鉢職員、現代武道学科の学生5名が韓国を訪問し、韓国体育大学校で施設及びテコンドーの練習を見学するなどした他、現地の文化や歴史に触れました。現代武道学科では2年時に同大学から講師を招いてのテコンドーの授業が予定されている他、海外武道実習として韓国の龍仁大学での実習も予定されています。今回のプログラムを通して学生間の交流を行えたほか、23日の教職員だけで行われた国際交流打ち合わせでは、朴澤学長と田中智仁新助手（東京事務所）も出席し、東日本大震災の時に頂戴した大学見舞金に対する御礼の他、現代武道学科を中心に今後の交流についての意見交換を行いました。



写真提供：中鉢職員

おおたに けんたろう
<参加学生> 大谷 健太郎さん、千葉 裕也さん、橋本 力さん
しぶや まさゆき
渋谷 正幸さん、新沼 智将さん

目次

韓国体育大学校との国際交流協定校プログラム	1
シーナカリニンウィロート大学と締結	2
郷野茂さんオルデンブルク大学に留学	3
柴田町との連絡会議開催 修士論文最終発表会	4
鬼首小学校でスキー指導 講座仙台学	5
宮城県グループホーム協議会研修会	6
学生の活躍	7

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えています。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室

直通 0224-55-1802
内線 佐藤美保 256
土生佐多 200
伊東宏之 271
Email:kouhou@scn.ac.jp

タイ王国・シーナカリンウィロート大学と締結



写真提供:シーナカリンウィロート大学

2月12-15日に朴澤学長、石森職員がタイ王国のシーナカリンウィロート大学（以下：SWU）を訪れ、国際交流協定書の調印を行いました。調印式ではSWUのChalermchai学長から「これまで5名の学生がお世話になっており感謝している。今後もさまざまな分野で交流をはかっていきたい。また、バンコクでの大洪水の際には温かいご支援をいただき大変感謝している。」との挨拶がありました。これに対して朴澤学長が「先に受け入れた3名に加え、東日本大震災で不安が残る中で更に2名の学生に短期留学していただいたことに感謝している。また、2013年3月にSWUなどが主催で開催される研究発表会に仙台大学からも発表者を出すなど、更に交流を発展させていきたい。」と挨拶しました。

式の初めには、これまでに仙台大学へ留学した学生の日本での活動の様子が紹介されるなど、終始和やかな雰囲気の調印式となりました。

シーナカリンウィロート大学と本学は平成21年1月に国際交流協定を締結し、学生の受け入れなど交流を図っています。今回の締結は有効期限となる3年を経過したことから更に3年延長したもので、調印後のティーパーティーでは、今後の更なる交流促進に向けての話し合がもたれました。

留学生が朴澤学長に帰国の挨拶



2月9日(水)に帰国する留学生が滞在中の御礼と帰国の挨拶を行うために朴澤学長のもとを訪れました。今回帰国するのは、2010年から本学で学んでいた大学院
シセイ
生の侍政さん(中国・上海体育学院卒)、
10月から科目等履修生として学んでいた
タイ王国・シーナカリンウィロート大学
のソンプラソン・プラセトシリさんとタニット・リンプラセルトさん、3週間の
短期交換留学プログラムを終えた台東大
ウェイ・チーイン
学の、魏綺瑩さん、陳宜吟さん、
ヨー・イーチェン
宜鞍箴さんです。
今後は本学で学んだことを活かし、更なる活躍を期待します。

郷野茂さん オルデンブルク大学(ドイツ)に1年間の留学

~国際交流協定締結後初の交流事業~



こうの しげる

郷野 茂さん（体育学科2年／宮城野高校卒）が4月から本学と国際交流協定を締結しているドイツ・オルデンブルク大学へ1年間留学することとなりました。オルデンブルク大学と本学は平成22年2月に国際交流協定を締結し、教育・研究や活発な学生間交流を検討してきました。今回の郷野さんの留学が本格的な初めての交流となります。郷野さんは本学入学前から海外留学に興味を持っており、2010年8月に本学が行った4週間のフィンランド短期留学に参加したこと

で、更に長期海外留学の希望を強めたそうです。昨年10月に小松恵一教授より「仙台大学から初めてのドイツ留学をしてみないか」との話を聞いて、「仙台大学で初」という言葉に心打たれて留学を決意したそうです。オルデンブルク大学では人間・社会科学部の体育学科に所属するそうで、留学期間は4月から1年間。3月9日に出国し、約1ヶ月間のドイツ語集中講座が組まれています。

郷野 茂さん（体育2年）

「留学を決めてから週に1度は小松恵一先生のところで1時間半～2時間、ドイツ語を教えていただいている。ドイツ語の難しいところは、英語よりも文法が細かく、文法を理解していないと辞書を引くことすらできないところです。言葉も含め不安もありますが、今回の留学を経て母語・英語・ドイツ語の3ヶ国語が話せるようになれば自分自身の能力としてプラスだと思いますし、将来が楽しくなるのではないかと考えています。ドイツだけでなく様々な国の方とも交流してこようと思います。」

東北師範大学に国費留学中の向井 智さんが来学



朴澤学長・日野臨時職員と共に

2009年9月から国費留学により東北師範大学大
むかいさとる

学院で学んでいる本学OBの向井智さん(平成21年3月卒)が一時帰国し、2月9日(木)に大学にも足を運んでくれました。向井さんの実家は岡山県のため、国費留学中に宮城県を訪れるのは今回が初めてです。修士論文に使用するアンケート調査依頼と、在学中にお世話になった先生方や東北師範大学の先輩である日野晃希臨時職員に会うことが目的ということでした。

東北師範大学大学院ではスポーツ社会学を専攻し、修士論文では「大学生のスポーツ活動に関する日中比較」をテーマに研究しているそうで、大学生の実態を調査するために、東北に所在する大学にもアンケート調査協力の依頼を進めているということでした。

向井さんは修了を今年7月に控えていますが、修了を1年間先延ばすことも真剣に考えているそうです。その理由は、国費留学が最長4年間まで支援してくれることと、今以上に語学力を高めたいとの想いがあるからだそうです。「修了を先延ばしするかは決断できていないので、修了できるよう修士論文は進めていきます。」と話していました。そして後輩に向けてのメッセージとして、「海外で生活するだけでも得るものがありますし、接する人、文化が違えば考え方も違ってきます。国費留学はお金がかからないですし、長期留学できるのは国費ならではです。私にとっても自分を見つめなおせた3年間となりました。今年9月入学予定の国費留学生の募集に対して東北師範大学だけ決まっていないと聞きました。学生の皆さんには是非、興味を持って参加してもらいたいと思っています」と話してくれました。

柴田町との連絡会議開催



2月16日（木）に本学第5体育館大会議室において柴田町と仙台大学との連絡会議が開催され、滝口町長をはじめとする柴田町役場の方々

及び、朴澤学長をはじめとする本学関係教職員あわせて約50名が出席しました。連絡会議の開催は3年ぶりで、柴田町からは東日本大震災に係る被害の概要と町の対応、また、平成24年度の主な事業等について報告がありました。朴澤学長からは中教審スポーツ・青少年分科会から今年1月30日に出された「スポーツ基本計画の策定について（中間報告）」をもとにスポーツ都市を宣言している柴田町に対して資料が示され、スポーツ基本計画の策定についての要請がなされました。

昼食には運動栄養学科学生が考案し、調理された入学式でも配布されている「美味しいばた！はなまる弁当」が出され、好評でした。

平成23年度 修士論文最終発表会

2月10日(金)E301教室において平成23年度修士論文最終発表会が開催されました。
発表者はいずれも2年コースの修了予定者です。
今年度の発表者は以下表のとおり（写真は吉川麻衣さん）。
大学院の先生方からの活発な質疑応答がなされ、
丸山研究科長からの総評をいただき今年度の発表会が終了しました。

写真提供：大学院事務室吉田課長



侍 政	中国上海市盧湾区の老養院におけるサービスの現状と課題
趙 倩穎	中国における体育・スポーツ政策の成果と課題 「陽光体育運動」に着目して
楊 兆淇	瀋陽市高齢者スポーツの現状と課題
徐 一文	新制度派経済学の理論に基づくプロ野球リーグの組織構造の効率性の分析 日中プロ野球リーグを対象として
戴 璞	太極柔力球実施者の特性に関する日中比較研究
張 坤	体育学習における「ニュースポーツ」の取り扱いに関する研究
吉川 麻衣	「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と発生要因に関する研究 小学生・中学生・高校生における「運動嫌い」と「体育嫌い」の関連性に着目して
稻福 貴史	中央競技団体の国際競技力向上を目的とした情報戦略活動の枠組みに関する 一考察
中津 範洋	幼児の自然体験活動の教育的意義に関する研究 発生論的運動学の立場から
鈴木 良太	跳馬における踏切技術に関する伝承論的研究
加藤 尚人	ラグビーにおけるスクラムからの攻撃戦術に関する研究
村上 雄大	ミニバスケットボールにおけるミスプレイの構造分析
藤田 雅士	経穴刺激機能付加スポーツ用タイツの着用が疲労軽減及び疲労回復に与える影響

大崎市立鬼首小学校でスキー指導

~大崎市教育委員会との連携事業~



写真提供:学生支援室

1月27日（金）と2月2日（木）の両日、オニコウベスキー場で鬼首小学校の授業の一環で全校生徒（約30名）が参加するクロスカントリー教室が実施され、藤井久雄教授と学生ボランティア有志6名がスキー指導を行いました。これは今年1月に締結した大崎市教育委員会と本学の連携事業の一環で、全校をあげてスキー活動（クロスカントリー、アルペン）に力を入れている鬼

首小学校の児童に対して、体育を学んでいる本学学生が指導したものです。学生にとっても児童と接する有意義な経験となったようで、ボランティアを行った小出 未来さん（健康福祉学科1年）は、「このボランティアに参加したのは実際の教育現場を体験できると思ったからです。鬼首小学校の児童、先生方にあたたかく迎え入れていただき、教員志望の私にとってはとても貴重な経験となりました。来年もぜひ参加したいです。」と話しています。

[参加した学生]

小笠原 沙織さん	(体育4年)
小出 未来さん	(健康福祉1年)
余語 武さん	(健康福祉4年)
横山 宗平さん	(健康福祉4年)
沼倉 歩美さん	(健康福祉4年)
伊藤 由佳さん	(健康福祉4年)

市民公開講座「講座仙台学」で高成田教授が講演



写真提供:坂根教授(生涯学習センター長)

学都仙台コンソーシアム「復興大学」事業である市民公開講座「講座仙台学」が東北工業大学一番町ロビー4階ホールほかを会場にして

2/4、2/18、2/25、3/3の4日間（8講座）開講され、18日の講座では高成田教授が「復興計画と現場とのギャップ」という題で講演しました。東日本大震災復興構想会議委員を務めた高成田教授の講座は定員を大きく上回る60名の方々に聴講いただきました。講演終了後も震災からの復興についての質問が多く出たため終了予定時間を大幅に超過しましたが、高成田教授は質問に対して丁寧に答えしていました。

なお、今年で9年目を迎えた市民公開講座「講座仙台学」は、仙台の都市としての個性、魅力を多彩な学問分野の成果によって紹介しており、今年度は学都仙台コンソーシアム「復興大学」事業の一環として、学都仙台コンソーシアムの加盟機関がそれぞれの専門性や特色を活かし独自の視点で出講しています。

宮城県認知症グループホーム協議会 南ブロック合同研修会



2月21日（火）、22日（水）、本学を会場に宮城県認知症グループホーム協議会「南ブロック合同研修会」が開催され、2日間で延べ64名の参加がありました。はじめに行われた講義では、

岩田講師から「高齢期の食と栄養」と題して、高齢期の食に関する機能の生理的特徴や調理する上での注意点等について話があった後、津吉講師から調理実習で使用する軟菜食の献立について説明がありました。そして、1グループ3~4名ごとに、運動栄養学科の新助手や学生が受講生のサポートに加わり、軟菜食の調理実習が行われました。実習後に行われたディスカッションでは受講生から「食材の切り方の工夫やご飯をお粥で代替する場合のエネルギー摂取量の比較により、高齢者の栄養摂取について理解が深まりたいへん勉強になった」などの意見が出るなど、有意義な講習会となつたようです。



写真提供：菊地志織新助手

瀬戸川彩友さんが全日本学生スノーボード選手権スノーボードクロスの部で準優勝



同大会に出場した若生奈歩さん（運動栄養2年：右）と共に

2月9日（木）に長野県X - J A M高井富士スキー場で行われた学生大会「全日本学生スノーボード選手権スノーボードクロスの部」において、スノーボード同好会の瀬戸川彩友さん（運動栄養学科2年）が準優勝しました。スノーボードクロス競技は、4人の選手が同時にスタートし、コースに設置された様々な障害物をクリアしながらスピードを競うことから「雪上のモトクロス」といわれ、オリンピックでは2006年トリノ五輪から正式種目となっています。北海道出身の瀬戸川さんは小学生の頃から趣味の一つとしてスノーボードを楽しんでいたそうですが、今シーズンから大会に参加することを決意し、授業の合間にみて週に2、3度スキー場に通って練習に励んでいたそうです。2大会目で表彰台という結果を出せたことについて瀬戸川さんも満足しているようで、さらに闘志をみせています。

瀬戸川彩友さん（運動栄養2年）

「スノーボードクロスは4選手が狭いコースを近距離で滑るので、接触して転ぶことも多く、ゴール前で3選手が転倒して最下位を走っていた選手がトップになることもあるスリリングな競技です。他の選手と競り合いながら勝敗を決するのが一番の魅力だと感じています。今大会では決勝を含め4レース滑りましたが、勝ち進むにつれて選手のレベルが均衡してくるため駆け引きも必要となってきます。大会に出たことで、これまで以上にこの競技に魅力を感じ、練習にも打ち込むことができています。今大会で2位になつたことで3月8日に開催される第30回JSBA全日本スノーボード選手権大会への出場権を得ることができました。この大会は国内大会で結果を残したトップ選手だけが集う非常にレベルが高い大会です。競技をはじめて間もない私が日本のトップ選手と競うのはおこがましいですが、出場するからには1つでも多く勝ち進めるよう全力を尽くしたいと思います。」



体操のスタンフォード・オープン 日本チーム優勝に貢献

~ 体操U-21強化指定選手 吉本日月さん ~



写真提供:鈴木良太新助手

2月18日にアメリカ・カリフォルニア州のスタンフォード大学が主催する「Stanford Open」が開催され、日本体操協会の男子U-21強化指定選手である吉本日月さん（体育学科1年）が日本チームの優勝に大きく貢献しました。本人も「初めての海外での試合でしたが、海外初体験ということだけでなく、国内の大学のトップ選手と

チームを組んで試合をできたことが大きな経験となりました」と話しています。

吉本さんは兵庫県出身。2才から体操を習い始め、高校は明成高に進学。兵庫から明成高への進学理由は高校から大学屈指の強豪である仙台大学の学生と共に練習できる環境が魅力だったそうです。高校2年の時には全日本ジュニアで結果を残してジュニアナショナル強化指定選手となり、本学入学後もインカレでの活躍によりU-21強化指定選手となっています。体操競技部の鈴木良太監督が「体操選手中では長身で体線が綺麗な選手」と話すように、生まれ持ったダイナミックな演技でチームの大黒柱となることが期待されている選手です。今後の目標を聞くと「大学ではインカレ優勝。将来はナショナル強化指定選手となり、世界選手権・オリンピックで活躍したい」と話しています。今後の活躍に期待がかかります。



障害者スポーツサポート研究部Co-Act.がボッチャ大会開催

~ ボッチャを通して障害者と健常者の交流を図る ~



2月12日（日）に第5体育館を会場にして障害者スポーツサポート研究部Co Act.が主催する「第30回Co Aピック ボッチャ競技大会」が開催され、競技参加者や施設の担当者、約150名の参加をいただきました。このイベントは日頃から障害者スポーツの普及・サポート活動等を行っているCo Act.が毎年2月に開催しているもので、パラリンピックの正式種目になっているボッチャ競技を通して、障害者と健常者の交流を図っているものです。特に今年は、東日本大震災による施設被害により、障害者スポーツを行う場所の不足という問題が深刻化していたため、障害者スポーツの機会提供も大きな念頭の

一つにし、今まで以上に多くの方々へ参加を呼びかけた結果、例年よりも多くのご参加を得ました。大会運営ではボランティアとして本学12名、東北福祉大14名、宮城教育大3名、東北学院大1名の協力をいただき、部員合わせて総勢50人体制で円滑に実施しました。施設面においても、ボッチャ競技の正規なコート面積よりも小さいコート4面だけしか作ることができなかった第1体育館から第5体育館に変更したこと、正規面積のコート12面取ることができ、時間にゆとりを持ち、参加者も伸び伸びとプレーすることができたそうです。

実行委員長の横山宗平さん（健康福祉4年）

「今大会ではロンドンパラリンピックへの出場を目指して真剣に競技に取り組んでいる方にも参加いただくことができ、他の参加者はその方から刺激を受けているようでした。また、福島県ボッチャ協会の方にボッチャの事前講習をしていただけるなど、来年に向けても良きステップになりました。」



写真提供: Co-Act.